NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

〒 350-1175　埼玉県川越市笠幡　１９４８－６　TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
郵便振込：「中帰連・平和記念館」（ ００１５０－６－３１５９１８）

仁木ふみ子･前理事長逝去

仁木ふみ子前理事長が逝去されました。

10 年目を迎えた「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の初代代表、その 4 年後に立ち上げた「中帰連平和記念館」の初代理事長をされた仁木ふみ子先生が、「急性肺炎」のため 8 月 9 日帰らぬ人（享年 85 歳）となりました。生前のご尽力に感謝申し上げると共に、心からのご冥福をお祈り申し上げます。仁木先生は日教組本部婦人部長や、「宋慶齢基金会」理事などの要職も果たしていたことは多くの皆様がご存じのことと思います。退職後も「中国山地教育を支援する会」などで中国の戦争被害の大きい地域へ学校建設や教材、レントゲン機器の寄贈など多くの貢献をされてきました。

（故･仁木ふみ子先生）

生前のご本人の意志を尊重し 8 月 13 日に「川越メモリードホール」で、教員時代の皆様を含め近しい人だけで『お別れの会』がもたれました。「記念館」を代表して姫田光義館長が（松村理事長は訪独中）「お別れのことば」を伝えました。また、宋慶齢基金会を始め国内外から多くの弔電も届きました。遺影の「写真」は先生が「宋慶齢から直接戴いたドレス」と、とてもお気に入りの服でした。

私たちは最後の 10 年を共にしてきましたが、先生のご活躍とご指導に改めて感謝し心からの冥福をお祈り申し上げます。

先生へ　「お別れの言葉」

姫田光義・館長

あまりにも突然のことで呆然としています。私たちの「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」「NPO 中帰連平和記念館」にとって、あまりにも大きな損失であります。

個人的な思いを言わせていただけば、1988年に初めて中国の唐山に行って、陳平さんと言う方にお会いし、日本軍の行った「三光作戦、特に無人区政策」を展開した燕山山脈を歩きました。その折に、陳平さんから日本人でこの地域を研究している人が他にもいるということを聞きました。その人こそ、まさに仁木さんであって、私はまだお会いした事のない仁木さんを密かに尊敬していたのでありました。

仁木さんはその後もずっと陳平さんと交流し、その親族の方たちのお世話もしておられたということで、私の尊敬の念はますます強まりました。そのような仁木さんから、元中国帰還者連絡会の高橋哲郎さんとご一緒に膝詰めで「受け継ぐ会」の代表に就くようにと強く勧められ、己の身の程も知らずにお引き受けしたのであります。また「平和記念館」館長就任の場合も同様でした。しかし人格・識見、さらには立派な活動歴からして、とてものことに仁木さんの御要望に応えるだけの力が無く、一重に仁木さんのご指導ご支援を頼りにしてきたわけであります。

あまりにも大きな損失と申し上げたのは、まさにその個人的なことをも含む会と記念館にとっての心底からの思いであります。

仁木ふみ子さん、長いご奮闘の生涯、本当にご苦労様でした。でも遥か彼方の彼岸に行かれましても、どうぞずっと私たちを見守っていてください。ご生前と同じように、私たちにご指導ご鞭撻ください。今日のように、日中友好関係が累卵の危うきに瀕している時ではありますが、どうか安らかに御休みください。私たちは決して貴女の志を無に帰するようなことはしないと申し上げたいと思います。さようなら、敬愛する　仁木ふみ子さん。中国語で「再見」と言えないのが残念です。これでお別れします。

「ライプチヒ便り」

松村高夫・理事長

仁木ふみ子先生葬送の日は私はにライプチヒ向けて離日する日に当たっていたため、葬送の列に加われず、機上でただ先生のご冥福を祈るばかりでした。同時に仁木・高橋哲郎先生をはじめ、多くの方々のご尽力の結晶として創立された中帰連平和記念館は、仁木先生亡きあとどのようになるのだろうか。私がその運営、発展に多少とも寄与できるとしたら、それは何だろうか、などと考えておりました。最近、記念館の日常業務が順調になされ、11 月 11 日の理事会とそれにつづく石田先生報告の第 2 回中帰連研究会も無事になされたと伺ってほっとしているところです。ライプチヒに参りましたのは、ここを根拠地として Fukushima March 11 and its Aftereffects というテーマで講義するためですが、すでにマンチェスター大学とフィレンツエ大学では終え、まもなくここライプチヒ大学でも終えます。が同時に、フクシマのあとドイツでもイタリアでもすぐに原発廃止の方向へ政策転換されましたが、それはどうして可能だったのかも探っています。フクシマにより人類史は「緩慢な大量虐殺」の時代に本格的にはいった（序曲的には広島・長崎ですが）と捉えている私は、今後も核兵器全廃・原発全廃に向けて微力を尽くしたいと考えています。

私の専門はイギリス社会史・労働史であるためイギリス滞在は比較的長かったのです

（松村先生から届いた「絵はがき」）

が、ドイツでの生活は初めてなので、すべてがイギリスとちがっていて興味津々の毎日です。

ライプチヒは「音楽の街」です。バッハが 27 年間指導した聖トマス教会（ここで「マタイ受難曲」を作曲）では、毎週２回無料でバッハなどのモテットを演奏しています。「トマーナ」とよばれる同教会の少年合唱団は今年が何と創立 800 年。トマーナは現在でも音楽家になるための登竜門とのことです。

バッハを復活させたのはメンデルスゾーン。かれはゲヴァントハウス交響楽団の指揮者として団員の待遇改善で市と交渉しています。そもそも指揮者なるものの第１号はメンデルスゾーンなのです。かれはまたライプチヒに音楽大学を創設。38 歳で死去。だが、ユダヤ人だったため、1850 年にワグナーに批判され、ナチスの時代にも銅像を撤去され、東独時代にも評価されず、ようやくマズールによってメンデルスゾーンは評価されたのでした。マズールは 1970 年にゲヴァントハウスの指揮者になり、メンデルスゾーンの曲を演奏して世界に知らしめました。音楽の世界でも民族差別は強く作用していたことがわかります。

1989 年の 10 月 9 日、ライプチヒのニコライ教会の月曜礼拝からドイツ統一を求めるデモが始まり、数万の市民がデモ行進。瞬く間に東独全土に広がりベルリンの壁崩壊に至りました。デモのリーダーとして先の指揮者マズールも非暴力のデモを訴えました。去る 10 月 9 日 はその統一を記念する集会がニコライ教会であり、つづいてアウグスツス広場（かつてはカールマルクス広場といった市の大広場）に移りました。広場での集会では、演説は短くきりあげられ、大舞台で数十名のダンサーにより統一までを芸術的に表現したモダンダンスが 1 時間ほど披露されました。広場に隣接する高層ビルでは、窓の明かりで「89」が示されました。ベルリンと同様、ライプチヒでもシュタージの本部や支部があった 建物は展示館になっていますが、そこで展示されているシュタージによるかつ ての住民監視体制を示す諜報装置・道具をみると、旧東独のコミュニズム、国家、独裁、自由、人権などについていろいろ考えさせられます。

遠くから無責任に日本の政治を眺めておりますと、中国敵視 のアジテーションがかなり成功して、日中関係をはじめ日本の政治はグチャグチャ、ドロドロといった感じで、ワイマール体制からナチスがでてきたようなファシズム前夜の危険性さえあるようにみえます。だからこそ、平和記念館の存在と活動はますます重要になってきているように感じています。では、よい年末年始をお迎えください。

連載　記念館資料室から　第2回

過去を見つめ直す人は「洗脳」されている？

今回は、三木栄一さんが「兄への手紙」という形式で戦犯管理所での認罪過程を振り返った「手記」をご紹介します。管理所での認罪過程を「洗脳」とする批判は最近も見られましたが、その干からびた論理を根本から崩してしまう内容です（読みやすさを考えて読点を補い、漢字の一部を新漢字等に改めました）

▼現実から目を背ける

三木さんも他の戦犯同様に、管理所収容直後は反発を繰り返しました。監房の施錠の音に「神経をいらだたせ」「狼狽させ」られるなか、＜戦犯＞とされたことを受け入れられず、「わめき立てました」。

「私はことさら皆んなに聞こえる様に大きい声を張り上げ『俺を一体どうすると言うんだ、俺は気狂いじゃない、鍵をかけるのは人間の侮辱だ…』と悪口の限りをつくして中国を罵りました」。

ただ、同時に恐れも感じており、「こうした恐怖からなんとかしてのがれようとした私は、管制されている実際の生活とは別な、頭の中で描いた生活を追い求め」、現実逃避に走ります。

「入営する時の祖父やお父さん」が「元気でやるんぢゃぞ」と「涙を流しながら」見送ってくれた様子が「頭の中でグルグル駆け廻」ると、「俺を家族の者と生木をさくように引き裂いているのはソ同盟〔ソ連〕と中国だ、（略）何が配慮だ、どんなうまいものを喰っ

てもどんなに面倒を見て呉れたって…」と逆恨みします。その挙げ句、酒や女といった「やたらに堕落した」「野卑な淫乱な夢」に耽る毎日に疲れ切り「夢遊病のように」なっていました。

秋が来て涼しくなった深夜、戦犯たちが蹴飛ばした布団を胸に掛けて回る管理所員の配慮に「感謝している同僚」がいる一方、三木さんは「いらん世話だ、眠れんぢゃないか」と睨みつけました。「私はこれ程すさび切った、何の愛情も感じとれないひからびた人間になり果てていたのです」。

▼「汚いものに触れる思い」で想起した過去

朝鮮戦争が膠着した頃でもまだ三木さんは反抗的で、「ある日私は特別喰い足りないと言う訳でもないのに、曲み切った私は『飯が足りない』と班長さんを責めいる様に言いました」。驚いた管理所員は謝りながら追加の食事を準備しました。しかし、三木さんはそのご飯を炭と混ぜて暖房の燃料代わりに使い、廊下中にご飯の焼け焦げた臭いが充満しました。「この様な反抗を二回となく三回となく行いました」。

見かねた管理所員は「蒼白になった顔に悲しみと怒りを込めて」こう言いました。「この一粒の米は老百姓〔農民〕の汗が滲み込んでいます…今中国の人でもこの様な飯を十分喰べてはいません。君は中国に来て何をやったか良く考えて見なければなりません。今君を管制している私は、過去君が中国人に取った態度で君にのぞもうと思えば、それは容易に出来る事です。しかし、お互いに復讐し合っていたら、この様な悲しみは何時までも取り除く事は出来ません。私は君に報復しようとは思いません。それは、私は帝国主義者ではないからです。良く考えて見なさい」。管理所員の「手は小さく振え、眼には涙をこらえられていました」。憤怒を必死にこらえながら理をもって接する管理所員の激情が、三木さんのしがみついてきた自尊心の空虚さを照らし出したのです。

(石田隆至 先生)

「自分がどんな人間であるかを知らず、私を取り巻く人々がどの様な人々であるかを知らないほど無恥で野蛮なものはありません。私はこの時よりはじめ粒の米が私にどんなつながりがあるかを寝ても起きても考え続けました」。やがて、反抗しながらも当然のように食べていた米が、かつて「中国人民から奪った米であり、夫を奪われ妻子を奪われた火の様な憎しみを持つ中国の人々から与えられた一粒一粒の米」だったことに気が付きます。「人間味の溢れる愛情の中でやっと人間らしい気持ちをよみがえらせる事が出来ました」。

ここから認罪が始まり、やがて「私はやっと戦争犯罪人である事が解るようになりました。しかし私にはこの事が解らなかったのです。知る事が恐ろしかったのです。だから私は心の底ではおどおどと慄えおののきながら空威張りをしたり観念の世界に逸脱し、事実から眼をふさごうとして一生懸命に足掻いて来ました」。自己の醜悪な側面を悪びれることもごまかすこともせずに率直に記すことで、過去の自分と決別しようとしているのでしょう。

「もっともっと戦争犯罪人である事実を見詰めなければならないと思っています。血に汚れた顔で『俺の過去は醜かった』と懺悔する事は容易な事ですが、戦争に依って苦しめられた被害者の悲痛な悲しみを少しでも理解する事は決して容易な事ではありません。自分の誤った過去を悔い、涙を流す事は容易な事ですが、歴史上消える事のない罪深い事実に対し“責任をとる”と言う事はどんなに真面目な努力を必要とする事でしょう」。

認罪が決して一度きりの経験ではなく、「過去の自分」と決別して被害者に向き合い、その責任を引き受けて生き抜き、深め続けていく困難な歩みとなることが自覚されています。自分が何に染め上げられているのかに気付かない状態を「洗脳されている」と呼ぶのだとすれば、自分は何にも囚われていないことを前提に、戦犯たちに「洗脳」批判を投げかけ続ける戦後社会は、きわめて巧妙な「何

か」に囚われているのではないでしょうか。

石田隆至（大学教員・平和学）

第1回　記念館「学習･研究会」　2012/7/29

「中帰連平和記念館の史料が語りかけるもの」
（報告者「中帰連研究会」事務局:石田隆至先生）

「研究・学習会」を開き、その第1回として石田隆至先生にお願いしました。今年、中国側に設置されることになった「撫順教育改造戦犯歴史研究会」と呼応する形で、記念館にも「中帰連研究会」（仮称）を設置し、石田先生と張宏波先生（明治学院大学教員）に事務局をお願いしています。報告の趣旨は以下の通りです。

記念館には数万冊の蔵書があるが、ここにしかない中帰連直筆の「手記」や自費出版された本、戦犯の肖像写真やネガ、また中帰連の全国大会や証言の映像、テレビ番組の録画、故・新井利男さんの取材記録など貴重な史料がある。

判決時に1062名いた戦犯の多くは既に亡くなり、健在の方は数十名くらいと推測される。証言できる方は10名もいないのではないか。そんな中でわれわれは何を「受け継ぐ」のだろうか。

中帰連については帰国当初から今も「洗脳」と批判する人たちがいる。これは時々の政治的・社会的背景と結びついており、中国を敵視したい人たちにとって中帰連の存在は大変厄介であり続けた。「洗脳」批判は常にその時代固有の課題と結びついているから、今後はわれわれが「現在の課題」

（「学習･研究会」川越の記念館で）

として取り組むことが求められる。

仮に後継組織が中帰連時代に比べて大きく縮小すれば、管理所での経験のインパクトが一過性のものであることを逆証明することになりかねない。

管理所で、赦しと自己変革により対立と憎悪が克服された事実が忘却されれば、あの経験を混迷の時代の「灯台」とすることさえ出来なくなる。

つまり、「過去の出来事」として中帰連に学ぶだけでなく、「現在の課題」のためにそれをどう発信していくかが問われている。しかし、後継世代の語りは当事者のようなインパクトを持たないという限界がある。すると、遺産として受け継ぐべきは、時代と向き合う上での中帰連独自の「構え」にあるのではないだろうか。つまり、日米政府や歴史修正主義者を単に批判したのではなく、「自分自身のあり方への批判を通じた批判」であろうとし続けたのが中帰連だった。容易ではないが、これなら受け継ぐことができるだろう。

「構え」に学ぶうえで、今後は「史料」がその重要な手がかりになる。中帰連の歩みに学びながら、組織が時代ごとの課題にどのように向き合ったのかを考えることを通じて、われわれが今の時代の課題に向き合うための「核」を作っていきたい。そのために史料の整理や劣化防止の為のデジタル化を始めたばかりで、今後、労力や費用も必要になっていく。「受け継ぐ会」岐阜支部の今井雅巳支部長のお力もお借りして、記念館に展示物を作成することも視野に入れたい。記念館の映像資料を各支部や来館者に利用してもらうことや、各支部の証言記録映像の集約も今後の重要な課題になる。

立命館大学国際平和ミュージアムで「平和のための博物館ネット全国交流会」

立命館大学国際平和ミュージアムで 10 月 26、27 日の両日、『平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会』が開かれ芹沢理事が参加した。参加者 40 名の内 13 人から報告があった。

初日は特別報告が主で「大阪人権博物館」

（リバティー大阪）から設立経過などの報告、橋下府知事（当時）が就任し「解りにくい、子どもが夢を持てない」などの指摘を受け、入館者の減少もあり補助金を 20 %カットされ来年度は補助金 0 の可能性もあり、補助がなくなると借地料の負担も考えられると深刻さを訴えた。

『女たちの戦争と平和資料館（ｗａｍ）』からは慰安婦問題が、「ひめゆり平和祈念館」からは 30 分の「アニメ」が完成し好評で、『絵本ひめゆり』が沖縄タイムスの「出版文化児童部門賞」を受賞したことも報告された。

山辺昌彦氏から『平和のための博物館における 15 年戦争関係の近年の取り組み』の研究報告、「第五福竜丸展示館」からは都立の施設だが運営は公益財団法人「第五福竜丸平和協会」に委託され、3・11 後入場者が減ったがほぼ回復した。入場者一人当たりの経費の観点から、都の施設で入場者が 10 万人を切るところは存続を検討するという事が言われた時期もあったなどの報告があった。

また、初日には『平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）』の諮問委員である安斎育郎氏（立命館国際平和ミュージアム名誉館長）と、同執行委員の山根和代氏（立命館大学国際関係学部準教授）から今年 5 月にハーグで開かれた INMP の理事会の報告があり、その中で財政難と共に日本人の会員が数人という現状で多くの方の参加を求めたいと訴えた。

2 日目の最初は元愛知教育大学教員の南守夫氏から『ドイツにおける空襲展示から』と題したドイツの視察報告があった。次に開館 5 年目を迎えた「山梨平和ミュージアム・石橋湛山記念館」からは「『平和の港』5 周年を過ぎて」と題し、毎年記念行事として安斎育郎、早乙女勝元、井出孫六、米田佐代子氏などに講演を依頼してきたこの 5 年間の報告と、入場者減少策として「石橋湛山平和賞」を設け 172 件もの応募があった。

次に芹沢理事が「中帰連平和記念館」の報告をし、加害にこだわり「中国帰還者連絡会（中帰連）」の意志を受け継ぎ、その資料の散逸を防ぐために設立し、他にも戦争関連の資料収集・整理・提供のため努力し、ＮＨＫや海外の学者などにも資料提供をしている報告をした。

「丸木美術館」からは近況と共に、自然エネルギー導入のため太陽光発電に力を入れていることなどが報告された。「長崎ピースミュージアム」からはマスコミでも報道され、当日も会場で配布され手作り「憲法箒（放棄）」が好評との報告があった。「わだつみのこえ記念館」からは、今回 5 人の戦没学生に焦点を当てた企画展『戦没学生たちの奇跡』の展示（11 月 23 日まで）の報告があり、開拓団の一番犠牲の多かった長野県の「満蒙開拓平和記念事業団」からは『満蒙開拓平和記念館』が長野県南部の阿智村に来春オープン予定と報告があった。また、岩国総合高校の教師からは「アンネ・フランク　パネル展」の経過や今後の協力要請があり、最後に「ピース愛知」から開館 5 周年記念の『丸木位里俊　原爆の図』展の取り組みなどの報告があり、同館ではハングルの「パンフ」も作成し今後も外国語のパンフを増やしたいという。

次回の「全国交流会」は来年 11 月に関東での開催を決めて閉会した。

記　念　館　近　況

- ♦「青森・東北ヘルプ」を通して青森の保養施設へ絵本を送付。
- ♦南相馬市「原町第三小学校」へ絵本など送付。
- ♦仁木ふみ子前理事長の「お別れ会」
- ♦ 15 回平和交流研究会「映画 ”かすかな光へ ”とお話の会」(主催：中国・山地の人々と交流する会)
- ♦「中国・寧徳師範学院」へ本を送付。
- ♦堤啓太君（起訴された元戦犯・上坪鉄一氏のひ孫）から「自由研究レポート」受領。
- ♦ 会員寄贈の中国切手 10 万円で売却カンパ
- ♦立命館大学国際平和ミュージアムで『平和のための博物館ネット全国交流会」（芹沢理事：参加報告）
- ♦来館者
  - ・北海道大学院生
  - ・法政大学学生 2 人
  - ・ジャーナリストの西里扶甬子さんが中国

ＴＶ局と取材のため、中国研究者ら５人と来館,「元中帰連」稲葉績さんにインタビュー。

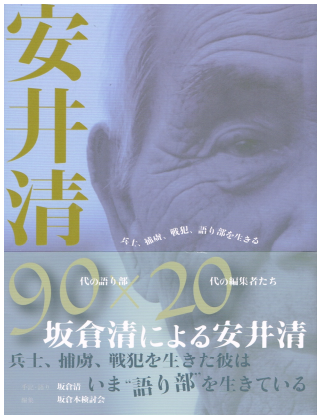
・山辺悠喜子さんの紹介で中国の映画監督李纓さん来館（日中友好映画祭・理事）

・川崎で『人のあかし』を上演する「京浜協同劇団」の皆さん５人が来館。

シリーズ　図書資料から　(2)

今年亡くなられた「元中帰連」お二人の著書をご紹介させて戴きます。

『安井清
～兵士、捕虜、戦犯、語り部を生きる』
（坂倉清）



「撫順の奇蹟を受け継ぐ会千葉支部が中心になり出版した。「安井」は坂倉さんの旧姓です。

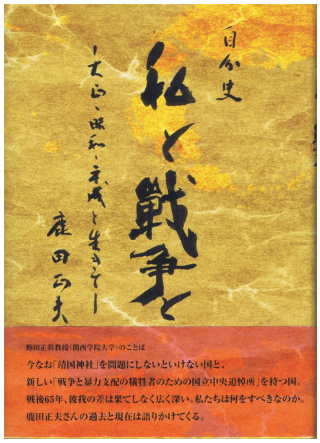
本の三分の一は長い間、坂倉さんが書き留めておいた手記が載っている。坂倉さんは 1920 年に今の千葉市に生まれ、貧しい家庭を何とかしようと軍隊に入り出世をめざした。背が低かったが「甲種合格！」だった青島上陸で軍隊生活が始まる。初年兵教育の「実的刺突」(中国人を「的」代わりに突き殺す）を目撃する。「放火、略奪、拷問」などの経験をする。戦後はシベリアに 5 年間抑留され、鉄道敷設作業などに就き、凍土の中で仲間の屍体埋葬などもしている。

56 年 7 月、967 名の仲間と共に「ダモイ（帰国)」と騙されて貨車に乗せられ綏芬河で中国に引き渡され「撫順戦犯管理所」に収容され収容所生活が始まる。「手記」には此処までの体験が載っている。

後半は「坂倉本検討会」の皆さんからのインタビューに答える形で坂倉さんの体験が載っている。坂倉さんも綏芬河でソ連の貨車から、中国の客車に乗り換え、看護婦さんたちが「病人や体調の悪い人はいないか」と車内を回り、暖かい食料が与えられ人間扱いされた時は感動したと言っている。

後半部分では私たちが知りたいこと、管理所内での生活の様子や、坂倉さんがどの様に変わって行ったか等か詳しくインタビューしている。

『自分史･私と戦争
～大正、昭和、平成と生きて』
（鹿田正夫）



本書は昨年 3 月、鹿田さんが自費出版された本です。鹿田さんは 1918 年、現在の島根県出雲市に醤油醸造業を営む家庭の次男に産まれ、軍隊に入るまでの「生い立ち、軍隊との関わり、シベリア抑留、撫順戦犯管理所の 6 年、帰国して」の 5 章から成るまさに「自分史」が綴られている。

軍隊当時の自ら参加した「三光作戦」にも触れその中で特に自身が小隊長として参加した「白陽寺攻撃」には大きな悔いが残ったようである。夜中に約 100 戸ほどの部落を襲い、慌てふためく女、老人、子供たち 30 人余りの射殺を部下に命じ、他にも幾つもの作戦や捕虜の生体実験も記してある。管理所の 6 年では周恩来指示によるその「人道的扱い」が記してある。

戦地で鹿田さんは親しくなった 4, 5 歳の中国人の小姉妹（お嬢ちゃん）と親しくなり、その子が「大病した時、救ってくれた」と、戦後、母親から「命だけは救ってあげて」との減刑嘆願書が出ていることを管理所から知らされたが、鹿田さんは忘れていた。管理所は「告発状は何百枚もあり、一人で 3 枚も告発を受けた者もいるが、嘆願書はこの 1 枚だけ」と鹿田さんに告げたが、特別扱いの誤解を恐れじっと胸にしまい込んでいた。

野田正彰先生が序文を書き、張宏波先生、

石田隆至先生が協力してる。

記念館「映像資料」から（2）

『認罪～中国･撫順戦犯管理所の6年』
（ＮＨＫ・ＢＳハイビジョン特集）
08.11.30 放送（110 分）

08 年 11 月 30 日にＮＨＫ・ＢＳで放送され、同年度のＴＶ部門の「ギャラクシー大賞」を受賞しＢＳで 3 回も再放送され、記念館も取材協力・資料提供した番組です。

映像は戦後シベリアに抑留された内の 969 人が 50 年 7 月、ハバロフスクから貨車に詰め込まれ「ダモイ（帰国）」と騙され貨車で移送されるところから始まる。ソ連から中国に戦犯として収容された先が「撫順戦犯管理所」であり、その 6 年の歳月を検証している。

その管理所の 6 年間を彼らはどう「人道的・寛大政策」で扱われたか、当時の写真や映像、そして日中双方の生存者の証言などで綴っている。

管理所は周恩来直轄で「一人の逃亡者も一人の死者も出さず、差別せず人格を尊重せよと」徹底する指示があったが、2 名の自殺者と 4 名の自殺未遂者が出ている。54 年、李徳全の来日で「名簿発表」があり、その後、部屋の鍵が外され、手紙のやりとりや文化活動が盛んになり信頼関係が築かれていった。

56 年の特別軍事法廷では「死刑、無期」を含む判決文が、周恩来の指示で 4 回も書き直され、高等法院が「これ以上の譲歩は人民が納得しない」とまで書き添えたが、周恩来は「20 年後にはわかる」と検察の意見を除け「起訴 45 人、死刑も無期もなし」の判決文が確定した。起訴された 45 人も最高禁固 20 年でシベリアの 5 年と管理所の 6 年が刑期に参入され満期前に帰国している。

当時は「まな板の鯉だった」（高橋哲郎）、「何時帰れるか分からず下向いて何も言わず涙流し泣いていた」（山口伊蔵）と、賠償金などその場しのぎの話しではなく、積極的に未来を見据えて行った結果であり、「日本との敵対関係のままでは平和の未来はないでしょう」と中国側はインタビューで答えている。

帰国第 1 陣は 56 年 7 月 3 日、天津から京都・舞鶴に着き 3 回に分けて帰国している。しかし、「大陸・中共帰り、赤」と差別され公安の監視も続き就職が困難だった人も少なくなかった。

元所長の金源さんは 66 年の文革で「日本人を優遇した」と農村に下方され、その悔しさを奥様の鄭英順さん（北京にご健在）が証言している。

中国側は元管理所金源所長夫人の鄭英順、管理所医師の温久達、副所長夫人の于瑞華、職員の崔仁傑（故人）、看護婦長の趙毓英さんたちの他に、金源所長さんなどの皆さんがテープ録音で証言している。

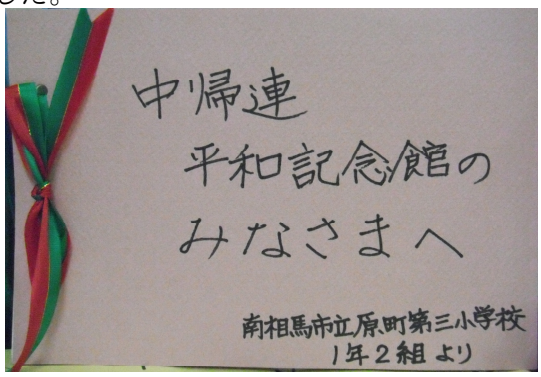
日本側「中帰連」は大河原孝一・元副会長（北海道）、高橋哲郎・元事務局長（東京）、小山一郎（故人）、絵鳩毅（神奈川）、難波靖直（島根）、金井貞直（故人）、山口伊蔵（故人）、坂倉清（故人）、西口政一（故人）、金澤正夫さん（故人）が映像の中で証言している。

「中　帰　連」　訃　報

坂倉 清 様（千葉県）11 月 2 日（享年 92 歳）
長沼節二 様(岐阜県）11 月 20 日（享年 94 歳）
心からご冥福をお祈り申し上げます。

本のお礼が届きました。

「受け継ぐ会」の平山・東京支部長のご紹介で、会員の皆様からお送り戴いた被災地への本を南相馬市原町第三小学校に送ったお礼が子どもたちから届き、担任教師に返信しました。



（子どもたちのお礼が綴られています）